



ベニカナメモチ

73 編は 賛歌。アサフの詩。とあります。(アサフについては50 編を参照してください。)83 編までアサフの賛歌が続きます。

冒頭の 神はイスラエルに対して／心の清い人に対して、恵み深い。(1) の言葉から、心の清い人々は幸いである、その人たちは神を見る。(マタイ 5:8) と主イエスが山上の説教で語られた言葉を思い起こします。心が清いとは、ひとすじに、ひた向きに神に従うことでしょう。それを知りながらも 神に逆らう者の安泰を見て／わたしは驕る者をうらやんだ。(3) と、神に逆らい、安泰で驕る者を妬む思いを持ったことを詩人は正直に告白し、悔いているのです。

詩人が羨む者は 安泰(3) 死ぬまで彼らは苦しみを知らず／からだも肥えている。(4) 病も彼らには触れない。(5) と、経済的苦労、身体的苦痛がない人です。けれども神に逆らい、傲慢／不法(6) を身にまとい、心には悪だくみが溢れ(7) 災いをもたらそうと定め／高く構え、暴力を振るおうと定める。(8) 彼らは 目は脂肪の中から見まわし(7) 口を天に置き／舌は地を行く。(9) と、横柄、不遜の極みの醜い姿です。究極的には そして彼らは言う。「神が何を知っていようか。いと高き神にどのような知識があろうか。」(11) と、自らの力を誇り、神の知恵を蔑み、神に逆らう者なのです。

ところがそのような者が安穩に暮らし、財を増していく様子を見るにつけ、清貧の詩人は、病、貧しさ、苦労が絶えなければ、虚しさを感じ、安泰に暮らしている人を妬ましく思うものです。自分の苦しみの意味を問いたくなるものです。わたしの目に労苦と映ることの意味を／知りたいと思い計り／ついに、わたしは神の聖所を訪れ／彼らの行く末を見分けた(16) 詩人は神の聖所を訪れます。そこで詩人は神が驕る者を 一瞬のうちに荒廃に落とし／災難によって滅ぼし尽くされるのを(19) 見るのです。彼らは心に神を置かず、安泰、富、権力を最高の価値と見なす偶像を置いていることを見分けたと言います。どのようにして、これを知りえたのでしょうか。詩人は あなたがわたしの右の手を取ってくださいるので／常にわたしは御もとにとどまることができる。(23) と告白しています。主イエスが弱い者の手を取って下さったように、神が手を取り、共にいて下さる、と詩人は聖所で知ったのです。「神が手を取って」という親しい関わりは詩編のこの箇所だけに記されています。神の愛に触れ、とどまることこそ、詩人の安泰であり、それに勝るものはないと喜びました。そして、平安、希望を実感するのです。さらに、指導者として、次世代への責任がありながらも、妬んだことを思い返し、慚愧の念に堪えません。あやうく足を滑らせ一步一步を踏み誤りそうになっていた(2) と悔い、わたしは、神に近くあることを幸いとし／主なる神に避けどころを置く。わたしは御業をことごとく語り伝えよう。(28) と、信仰を告白します。純真な信仰に生きたいと願う正直な詩人の賛美です。

『讚美歌 21』では 477「主イエスを思えば」 <https://sanbika.blog.ss-blog.jp/2016-04-20> を関連付けています。12 世紀のフランスの修道士ベルナルの詩と言われています。ローマ典礼の晩禱のメロディを採用しています。ジュネーブ詩編歌は「心の清い人」を表すような、澄みきったリコーダーの四重奏です。 [Psalm 73 Genevan Psalter - setting by Claude Goudimel - recorder quartet - YouTube](https://www.youtube.com/watch?v=...)